

かながわそうしょかんこうかい

作者: 神奈川叢書刊行会

成立: 昭和40-44年(1965-1969)



叢書解題

神奈川叢書刊行会が「神奈川県歴史、民俗その他の研究に資するため、おもに近世期の未刊資料の刊行と、稀覯図書の復刻をおこないます」との趣意書により発行した叢書。昭和40年12月から同44年9月までの間に9点を刊行した。



構成及び各巻解題 [K08/3]

第1編 『貞享三年御引渡記録集成』 石井富之助解説・校訂

貞享2年(1685)12月、稲葉正通は小田原から越後頸城郡高田城に移り、翌3年1月、下総佐倉城主・大久保忠朝が祖先の旧地小田原の城主に封ぜられた。「貞享三年御引渡記録」はこの国替えのとき、稲葉家から大久保家へ引継がれたもので、当時の小田原領全般を知るための史料として重要である。この記録は相当広く書写されたものようで、主なものとして「片岡文書引渡記録」「小田原史料覚書」「小田原御府内外山里海陸諸旧記写」「小田原御領内諸法式」の4種がある。ただし、これら各史料には省略や記述の簡略化があり、研究の上ではなほ不便である。この不便を解消し、併せて資料の散逸防止と一般への普及のために4種の資料を総括したのが本書である。記述はできる限り2種以上同文のものを採用し、各項の文末に符号で典拠を示している。配列は「小田原御府内外山里海陸諸旧記写」による。

第2編 『誠話採筆 上』

第3編 『誠話採筆 下』 安西勝解題・校訂

全国各地の奇談・異聞を集めたもの。著者は確定できないが、早雲寺の柏州和尚の聞書をもとにしたと推定される。柏州和尚の見聞を何人かが整理筆録し、柏州自身が各話の末尾に注記を施したものが、本書の原型であろう。序文に「享保丙午年秋」とあり、原本は享保11年(1726)の成立と考えられる。底本は円城寺成夫所蔵の写本である。底本の目録には全10巻83話となっているが、本文は巻5までの39話しかなく巻6以下を欠く。元の上下2冊本のうち下を亡失したらしい。底本を2分冊にし、上には巻1から巻3まで、下には巻4から巻5までを収録。下の巻末に人名索引、地名・寺社名索引、

事項索引及び年号索引を付す。

第4編 『相中襍志 智』

第5編 『相中襍志 仁・勇』 石井富之助解題・校訂

小田原・箱根を中心に、大磯、平塚、藤沢にも及ぶ相模国内の歴史・地誌・史跡名勝・社寺・墓所等について、古書の引用、見聞・伝説等の採集により記述した地誌。著者は三浦義方。（「#28 相中襍志」参照）

第6編 『古餘綾見聞志 卷上下』 中野敬次郎解題・校訂

本書の著者、成立年代については不明であるが、小田原藩士の逸事を記録したものである。目次の記述は次のとおり。①大久保盛成事 真田六右衛門器量事、②篠崎大助幸成馬術事 金成弥兵衛父子武術事、③金成休武、杉山直道鎗術之事 酒井伴六弓術之事、④神谷与右衛門武術の事 立石郡内鍛錬の事。底本は解題・校訂者の所蔵本である。巻末に索引を付す。

第7編 『津久井縣地誌搜索筆記 築井鑑』 安西勝解説・校訂

天保4年(1833)新編風土記編纂事業に伴い八王子千人同心・原胤広が津久井県地誌御用を命じられたとき、八木甚右衛門忠讓はその手附（書記）となった。八木は津久井県地誌調査に関して8種類の文書を残した。本書はそのうち天保6年の「津久井県地誌搜索御用筆記」を校訂したものである。八木甚右衛門忠讓は、安永元年(1772)武蔵国生まれ、天保14年5月病没。

「築井鑑」の原題は「津久井鑑」であったと推定される。編著者は四方庵澧水とされているが確証はない。成立は文化9年(1812)とみられる。内容は、津久井県各村の村高・支配・寺社の簡単な記録である。底本は天保7年の八木芳蔵写本である。

第8編 『鳴たつ庵縁起 附 鳴たつ金石誌 秋暮亭再建寄附並諸入用紙』

石井光太郎解題・校訂

「鳴たつ庵縁起」は、鳴立庵を中興した庵主・大淀三千風がその由来を自筆で記した卷子本。三千風は西行法師の五百年忌を前に、伝説化していた鳴立澤の位置を大磯に定めて、西行に関係のある遺物を整え、西行遺跡鳴立澤として天下に公称した。三千風の入庵は元禄8年(1695)なので、この縁起も同時期の作成とみられる。底本は神奈川県立金沢文庫蔵の写本。

「鳴たつ金石誌」は、鳴立庵に現存する金石碑の碑文を、碑の形状とともに翻刻したもの。庵の創始者・崇雪と歴代庵主の点描(生地・姓名・号・著書等)を添える。

「秋暮亭再建寄附並諸入用紙」は、庵主・葛三が堂宇秋暮亭の再建・新築を企てた際の寄付金品と建築費の明細を記した寛政12年(1800)の文書である。

第9編 『小田原領西筋村々高ノ帳 元禄十三年高覚帳』 内田哲夫解題・校訂

「小田原領西筋村々高ノ帳」は足柄上郡開成町の旧金井嶋村名主瀬戸家が蔵する写本である。年代の記載がないが、寛永元年(1624)から同16年の間の村高を記録したものと推定される。「元禄十三年高覚帳」は秦野市の旧柳川村名主熊沢家文書の一つである。両史料とも江戸時代の小田原領、特にその西筋の村々の村高の変化を知る上で貴重なものである。